

# 英語 I におけるメッセージ（伝達内容）を重視した インターラクティブな授業の実践

—動機付けから自己表現へ—

森 慎二<sup>1</sup>

英語でコミュニケーションする能力を涵養するために基本的に考慮すべきこととは何かを探ると共に、生徒が意欲的に取り組み表現力をつけていくためのインターラクティブな指導のあり方を、高等学校では総合的な英語学習の科目である英語 I において、メッセージ（伝達内容）を重視することを柱とし探ってみた。

## はじめに

オーラル・コミュニケーション関連科目が高等学校に導入されコミュニケーション能力を養うことに目が向けられるようになったが、多くの生徒が履修する高等学校の英語 I・II にその指導法が十分活かされているとは言えない現状である。大学入試問題レベルの内容をコミュニケーションに扱うことは非常に難しいことは確かだが、学習者の学習意欲を維持しつつ実用になう英語力を身につけるには聞き・話すことを基本としたコミュニケーション能力の育成抜きには考えられない。そこで、以下の2点即ち、  
①メッセージ（伝達内容）を重視することを柱としたインターラクティブな英語の指導法  
②コミュニケーション能力を高めるという観点に立った文法項目の指導法について探ってみた。

## 研究内容

### 1 習得と学習（授業で中心におくこと）

クラシェン (Stephan Krashen) は「Principles and Practice in Language Acquisition」の中で習得 (acquisition) と学習 (learning) を区別し、習得は意味を伴う言語を「拾い集める (picking up) こと」、学習は「文法を意識的に知ること」としている。そ

して、理解可能な言語入力 (input) が第2言語教育プログラムの決定的に重要な要素であるとし、文法の学習は付随的なものとしている。

### 2 動機付け

英語が「嫌い」あるいは「苦手」と思っている生徒は多く、そうした生徒たちを授業に引きつける方法としてまず授業の雰囲気作りの問題が考えられる。それには、教師・生徒双方の人間性や姿勢・態度が根幹となることは勿論である。

クラシェンの情意フィルター仮説 (Affective Filter hypothesis) を参考に、生徒にとって望ましい学習環境の条件として次のことを考える。

- ①不安が少ない
- ②努力が認められ自信が持てる
- ③周囲と良い人間関係ができています

また、英語に対して好感を持っていることも生徒が意欲的に取り組む上で必要なことである。

もう一つの問題は、教材の内容の選択、授業形態、授業展開、学習作業等を工夫することである。その方策として以下のことが考えられる。

- ①学習者中心となるようにする
- ②インターアクション（相互伝達活動）を多くする（情報交換を誘引する活動、グループ・ペアワーク等）
- ③知的好奇心の沸くメッセージ（伝達内容）にする
- ④個々の学習者と関連づける（個人化・創作性）
- ⑤自然でリアルな内容や場面にする

1 平成10年度 長期研修員（英語）  
県立ひばりが丘高等学校

⑥習ったことが教室内外でコミュニケーションに活かせるようにする

⑦個々の学習作業の内容・目的を明確にする

以上を考慮の上授業を計画し実践した。中でもメッセージ（伝達内容）とインターアクション（相互伝達活動）は大切な要素であるので注目した。

### 3 メッセージ（伝達内容）の重視について

#### (1) コミュニケーション能力習得の点から

自然な会話において、我々が意識の中心におくのはメッセージ（伝達内容）であり、文の構造や形式といったことは殆ど意識の中に入らない。自分がはっきりとした伝達内容を持つ時にコミュニケーションが起これ、その過程においてコミュニケーション能力が習得される。

#### (2) メッセージを深める点から

メッセージは、日常的で易しい事柄から哲学や思想等の難解な事柄までそれぞれ様々であり、何をどこまで扱うかということに関してはグローバル・スタンダードのようなものを1つの基準とすることは参考になる。例えばオランダでは小学校ですでに日常会話を、高等学校では社会問題などのかなり高度な内容を扱っていると聞いている。世界の人々の共通の話題となるような内容に関して、自分の意見を述べたりディスカッションしたりできるようなレベルにまで、メッセージ自体を高めていく必要がある。

授業においては教科書の内容を生徒に導入する際工夫が必要となる場合が多い。興味を引くように、または理解を助けるように、非言語的手段（写真、絵、ジェスチャーなど）を利用したり、補足的に情報提供したり、学習者自身との関連づけを図るためのQ&A等を行うことによって、メッセージの深化をはかった。

### 4 インターアクション

コミュニケーションを重視した授業では、授業者と学習者間及び学習者同士のインターアクションが鍵となる。インターアクションを促す要因としては、

①教授者が理解可能な目的言語（この場合英語）

で話す

②教室英語を定着させる

③グループやペアによる活動を多く取り入れる

④インフォメーション・ギャップを利用する

⑤ゲーム的要素を盛り込む（文法形式を気にせず活動自体に集中できる）

⑥対話やスキットを通して疑似体験をさせることなどがあげられる。

### 5 文法項目の扱い

コミュニケーション能力涵養という観点に立つとき、文法事項の説明よりコミュニケーション活動を優先させるべきであると考えられる。基本的に文法事項はできるだけ自然な context（文脈）の中でコミュニケーションタイプに扱いたい、必要に応じて日本語による説明を加えたり、まとめて学習することも理解を深め正確さを追求する意味で有効であると考えられる。

### 6 授業への応用

#### (1) 授業の流れ

上述した諸点を踏まえて基本的な授業の流れを次のように考えた。

① Warm-up

② 内容の提示

③ True or False Questionsによる内容把握度確認（内容に関する大まかな質問）

④ テープ・リスニングにより繰り返し聞く。

⑤ 細かい点にまで触れた T or F Questionsで内容把握する。

⑥ 語句の確認／発音練習

⑦ 内容に関する Q & A をペアで練習する。

⑧ 個別に Q&A を行う。（すでに TorF やペアで練習している部分もあり、よりスムーズに発話できる）

⑨ 文法事項の簡単な説明とダイアログの中で練習

⑩ テキストの音読練習

⑪ テキストの内容に関するダイアログ練習

#### (2) 教科書内容のダイアログ化

学んだ内容について自由に自発的に話し合えることができれば理想的であるが、実際には生徒の多くは語句や表現力や discourse（会話の流れ）などの面で未熟であり、自発的な会話は成り立たないことが多い。そこで、ある程度の語句や discourse を与えたダイアログ・シートを用いるのが実用的であると思われる。

次の例は、研究授業で使ったダイアログ・

シートの一部である。19世紀中頃のミシシッピ川で当時のフロンティアの人々を楽しませた showboat の話が教科書の内容であったが、それをタクシーの中という場面設定での会話形式にしてみた。( )内は空白になっており、生徒が自分で考えて語句を入れて答えることになる。学習者がメッセージ(伝達内容)を把握していれば、かなりスムーズに対話できる。

#### Dialogue (L9 Part 2)

*Ken has been traveling in the south central part of the USA. Now he is going to the airport to go back to Japan. He is in a taxi and talking with the taxi driver.*

Taxi Driver : Where are you from ?  
Ken : (I'm from Japan).  
T. D : Is this your first visit to the US ?  
Ken : (Yes it is. / No, this is my second visit).  
T. D : Did you like Tennessee ?  
Ken : Yes, very much.  
The Mississippi is really great. I studied a little about the Mississippi.  
T. D : Oh, did you ?  
Have you ever heard of a man called William Chapman ?  
Ken : Yes. He was (an actor) who built the first (showboat). Right ?  
.....

### (3) インフォメーション・ギャップを利用した活動

#### ① 「Find someone who……」

人探しゲーム。プリントには“Find someone who has played tennis.”といった英文が書かれており、生徒はクラスの中を歩いて項目に該当する人を探し、その人の署名をもらう。項目数分署名をいかに早く集めるかを競う。勿論話すきっかけとして、“Excuse me, but may I ask a question ?”といった表現を付け加えることも指示した。

<生徒の反応>：経験上かなり活発な活動を予想していたが、以外と落ち着いた動きで、男子同士、女子同士のインターアクションが多く

見られた。クラスの間関係性を垣間見るといっても有意義であった。

#### ② ランニング・ディクテーション

1チーム4名のチーム対抗ゲーム。メンバーはそれぞれ「問題を伝える人」、「答えを探す人」、「答えを聞いて書き取る人」、「答えを覚えて審判に伝えに行く人」の役割をする。教室の数カ所に問題の答えが載っているプリントが貼ってあり、そこに答えを探しに行く。早く全問正解したチームの勝ちとなる。

<生徒の反応>：問題の内容が、芸能人の生年月日や好みといった比較的興味のありそうな内容であったこと、データは表形式で書かれており絵も使ってあったこと、生徒の緊張感が多少薄らいでいたことで生徒はかなり活発に活動した。それぞれの役割の担当者がきちんと自分の役割を果たしたか、英語によるコミュニケーションがなされていたか、といった問題が残るが、緊張感がほぐれ、自分の行うべき行動が分かっていて、理解できる内容であれば、生徒は非常に活発に活動する。

### 7 授業後の考察

グループ活動でゲーム的な要素を盛り込んだり、インフォメーション・ギャップがある状態では、理解できる内容を扱えば、インターアクションが活発になることが確認できた。また、ペアで練習した後に個人に質問をすることで、生徒の発話がスムーズになることも確認できた。

所謂一般的な授業における生徒のメッセージ(伝達内容)の理解度に関して興味深い発見があった。

授業の中でオーラル・イントロダクションという形で英語によるストーリーの概要を紹介する部分があるが、11月の授業でその内容がどの程度理解できたかという質問に対し、生徒の自己判断による回答では、5割以上が理解できたと答えたのは、クラス全体では62%、英語が「好き」または「どちらでもない」と答えた生徒では65%、英語が「嫌い」と答えた生徒では54%であった。内容の半分を理解できれば、授業に対する不満、不安はある程度解消できるであろうと考え参考とした数字であるが、英語が「好き」「嫌い」という違いからくる理解度の差は予想ほど大きくなかった。

次に内容に関して興味を持てたかどうかということと理解度との関係を見てみる。

まず、1月の授業において、内容に興味「持てた」と答えた生徒と「持てなかった」と答えた生徒の割合はちょうど半々であった。教科書は「Powwow English Course I」(文英堂) Lesson10 “A Guinean's Dream”を扱ったが、教科書内容に対する生徒の印象度としても参考になる結果である。勿論教科書の内容だけでなく、提示の仕方も大きく関与していると思われる。

内容の5割以上が理解できたと答えた生徒は全体の69%であったが、内容に関して「興味を持てた」「まあまあ興味を持てた」と答えた生徒では89%であった。一方「あまり興味を持てなかった」「つまらなかった」と答えた生徒では52%であった。

この結果からわかることは、メッセージに興味を持てるか否かが、英語が「好き」か「嫌い」かということより深く理解度に関わっているということであり、興味深いメッセージの提供がいかに大切かがわかる。

## 8 今後の課題

ゲーム的要素を含むグループ活動に比べ、テーマに基づくディスカッションは、多少の日本語使用を認めたもののそれほど活発ではなかった。原因としては経験不足や生徒同士の人間関係が十分できていなかったことが大きいと考えられる。高校1年生という年代では、まだ男女間の微妙な壁がインタラクションにブレーキをかけていると思われる。

また内容的に充分興味深いと言えなかったことも活発性に欠けた原因であろう。教科書内容におもしろ味を付け加えるのには多くの準備を必要とする。ただ、自分自身の問題として捕らえ考えるような活動に関してはかなり真剣に取り組んでいたことから、個人との関連付けの大切さを確認した。

「英語を聞く・話す活動の多い英語によるコミュニケーションを重視した授業、日本語を多く使い日本語訳や文法説明を中心とした授業のどちらを希望するか」の問いに対しては、日本語による訳や文法の授業を希望するという回答が63%と圧倒的に多かった。その理由として、英語による授業は解りづらいことをあげている生徒が多い。確かに文法説明をし、日本語訳をして内容をしっかり確認するという授業は、生徒にとって理解できたという気持ちを抱

かせるのだろう。しかし、それは日本語による英語についての学習であって、それだけではコミュニケーション能力がつかない。生徒が理解できたことをもとに少しずつ発話量を増やし、それを正確なものにしていくという過程を巧く指導できれば、必ずや生徒の不満不安は解消しコミュニケーション能力が育っていくものと信ずる。

また、話された内容が十分に理解できなかつたり伝わらなかった時に対処する方法を学ぶことが、コミュニケーションする上で学習の初期段階から大切であることを生徒に理解してもらう必要がある。

## おわりに

コミュニケーション能力を重視した授業において、メッセージの持つ意味はあまりにも大きい。高次元のメッセージを授業で扱うことの難しさは、外国語であれ、母国語であれ同じであろう。学習者が学習内容に興味を持ち、それに対して自分なりのメッセージを相手に伝えるという活動は、英語という枠を越えて重要である。一方、外国語を通して相手のいうことを理解したり自分を表現できることは楽しいことであり、異なった価値観・見方を知ることはいずれの人にとって非常に興味深いことであろう。そのためには、やはり有意義なコミュニケーション能力を涵養できる授業が欠かせない。

最後に今回の研究授業に際して、いろいろご尽力いただいた県立ひばりが丘高校の英語科の先生方をはじめとする諸先生方に感謝の意を表したい。

## 参考文献

- Krashen, Stephen D. 1987 “PRINCIPLES AND PRACTICE IN SL ACQUISITION” Prentice Hall
- Brown, H. Douglas 1994 “PRINCIPLES OF LANGUAGE LEARNING AND TEACHING” Prentice Hall
- Savignon, Sandra J. 1983 “COMMUNICATIVE COMPETENCE : THEORY AND CLASSROOM PRACTICE”

Addison - Wesley Publishing company

- 高梨庸雄、緑川日出子、和田 稔 (1995) 「英語コミュニケーションの指導」研究社出版
- 神奈川県立教育センター 研究集録14集～17集 (平成4年度版～平成8年度版)